

リサイクルの 大切さ知って

可児市とサントリー、バローが連携して、持続可能な開発目標(SDGs)と環境に対する啓発に力を入れている。7月に同市の広見小学校でリサイクルを推進するための授業を行ったほか、同市大森のバロー人材開発センターで「親子で食・プラ講座」環境博士への道を開き、訪れた12組29人の親子に、分別の大切さを伝えた。(岡部導智賢)

3者は使用済みペットボトルを新たなペットボトルへ再生するリサイクル(通称ボトルt o ボトル)推進で協定を結んでいる。SDGsの大切さは分かるが、どう行動するのか分からない人が多いとして、夏休みに親子で環境について考える機会をつくった。

講座では、サントリーの青柳利美さんが「ペットボトルは9割ほどが卵パックや繊維などにリサイクルされているが、結局最後はごみになる」「ペットボトルになるのは現状で2割程度」などと説明。ボトルt o ボトルは、永遠に資源として使える循環型リサイクルとして有効なため、「い

可児市、サントリー、バローが親子向け講座

ボトルt o ボトル 循環型社会の実現へ啓発



環境を守ることを伝えるサントリーの青柳利美さん
(右)＝可児市大森、バロー人材開発センター

ずれば全てをボトルt o ボトルにしたい。そのためにはキヤップやラベルとの分別、飲み残しをしないよう一人一人が心がけてほしい」と話した。

同市はカーボンニュートラルの取り組みを説明し、バローはサーモン、イカのさばき方講習を開き、環境を守ることが食を守ることにつながると伝えた。参加した寺澤幸汰

君(10)＝同市下恵土＝は「飲みかけでボトルを捨てないようにする。教えてもらったことを周りにも伝えたい」と話した。

同市環境課の中島めぐみさんは「子どもに対する啓発を重視している。環境や食など、企業が持つ強みを生かしてもらい、今後も連携していきたい」と話した。サントリー担当者の光森秀典さんは「循環型社会の実現には、多くの人に取り組んでもらわなければならないが、啓発活動は企業だけでは限界がある。自治体、企業が連携した活動が他の地域にも広がってほしい」と話した。